

令和4年度 第1回国産材の安定供給体制の構築に向けた 北海道地区需給情報連絡協議会 議事録

- 1 日 時：令和4年6月1日（水） 10：00～12：00
- 2 場 所：ウェブ会議（Zoom）
- 3 参加者：別紙のとおり
- 4 議事次第及び配付資料：別紙のとおり
- 5 概 要

（1）冒頭挨拶

○北海道素材生産業協同組合連合会 高篠 会長

本日は、林野庁はじめ北海道森林管理局、北海道水産林務部林業木材課、道内各地の林業、木材産業、住宅産業に関わっておられる川上から川下の各分野の皆様、大変お忙しい中、本会議に御参加いただき心から感謝申し上げます。

依然としてコロナ禍が続いており、さらに、ロシアのウクライナ侵攻は長期化し、世界情勢は混沌としており、木材を巡る環境も大きく変化している。

一方、昨年6月には、新たな森林林業基本計画が閣議決定され、木材産業の競争力の強化、中高層建築、非住宅分野等での新たな木材需要の獲得等に取り組んでいくこととしており、さらに10月には、公共建築物から建築物一般に対象を拡大して、木材利用の促進に取り組むこととされている「脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材の利用の促進に関する法律」が施行された。

また、2050年カーボンニュートラルの実現に向けて、木材及び木質バイオマス利用の促進などの取組も、地球温暖化対策として求められている。

木材需給については、コロナ禍において輸入材の入荷量が減少し、木材価格も高騰している。道産材の需要の高まりも見えており、カラマツ、トドマツの原木不足も懸念されている。

北海道地区の現状及び取組や課題等の情報を今回共有することが重要と考えており、本日の協議会での情報共有が各分野の取組、そして国及び北海道の施策や予算などに反映され、道内の林業、木材産業、住宅産業の発展に寄与することを期待している。貴重な意見、そして情報提供など、活発な情報交換をお願い申し上げます。

（2）議 事

① 需要動向について

○北海道大学大学院農学研究院 柿澤 教授（以下、柿澤 座長）

前回、1月のときは、北海道は相対的に全国に比べると影響が少なかった。建築材への活用に関して様々な課題を共有するとともに、進展させるための議論がされた。

今回は、ウクライナ侵攻をきっかけとして、カラマツ、さらにトドマツに関してかなり大きな状況の変化が出てきているので、それを中心に情報交換ができればと思っている。

最初に、全般的な状況について、林野庁から資料説明をお願いします。

○林野庁木材産業課 永島課長補佐

資料1～4及び参考資料について説明。

○柿澤 座長

1月以降の状況を中心に説明をいただいた。

ここからは情報交換に移りたい。冒頭にも申し上げたように、ウクライナ侵攻以降、かなり大きくカラマツを中心にして価格高騰などがあったので、特に1月以降の状況について、できるだけ多くの皆さんから説明をいただきたい。川下、川中、川上という順番でまとめて少しずつお話を伺っていききたい。

まず、プレカットまで含めた川下側から、1月以降の現在の状況と、今後の見通しについて情報提供をいただきたい。

○(一社)JBN・全国工務店協会 武部 理事

1月以降、木材の調達に関しては、若干安定してきているような感じは受けるけれども、まだ現在進行形なのかなという感じはする。ただ、ツーバイ材は、高いけれども多少は入ってくるルートがあり、以前ほど緊迫感はないのかな。当社は、どちらかという则在来軸組が多いので、ツーバイ材は、屋根断熱でツーバイトゥエルブを垂木に使ったりする利用の仕方なので、使い方自体は少量なので、そういうルートを見出してきた感じはある。

それと同時に、それ以上に深刻なのは、全体的な値上がりです。建築資材全体の2次製品も含めて、非常に切迫感を感じている。というのは、設計の依頼を受けて、設計を仕上げた後に積算入って、その積算がお客さんの予算と全然合わない。その乖離が大きくてまた設計のやり直し、場合によっては、契約に至らない状況が住宅のレベルでは多々あって、この先行きが非常に不安感がある。木材需給が安定して、値段がある程度安定して、供給体制もきちっとできる、これは一番、基本になるとは思いますけれども、全般的にはそんな状況がこの後も続いていくのかなという気はしている。

○全建総連 北海道連合会 矢萩 書記長

今の話とちょっと重複もするけれども、建材の関係では、例えばステンレスだとかアルミとかいった、防錆的な建具なんかも、ネジ、釘1本に至るまでの材料、部材がなかなか入ってこなくなっている状況があり、特にステンレスの原料となるニッケルが軒並み品薄状態になっていることがあり、今、水回り関係とかですと、3か月から半年待ちになっており、価格についても1.5倍ぐらいになっていて、何とか工務店側で利益を削って持ちこたえてきた経緯もあったけれども、もう既にそういう状況でもなくなってきて、組合員の半分ぐらいの人からは、既に見積り価格に転嫁せざるを得ない状況になっていることがあり、結果的に契約に結びつかない状況も今増えてきていて、今後の見通しについ

ては、まだしばらくは続くのだらうということで、業者側としても少し品不足、納期の遅れ、金額提示の高騰といったものは、ある程度予想した上でエンドユーザーとは接していかなければならないということを感じている。

○北海道プレスカットセンター（株） 岡本 取締役

私どもでお付き合いしているハウスメーカー、ビルダーの状況も、やはり住宅ローンの取りつけが難しくなってきた。札幌市だったら大体上物だけで、35坪で3,000万円から3,500万円位の価格の状況。住宅ローンも夫婦ダブルローンのフラット40を使用するケースが増えている。木材だけではなく、全般の資材の価格高騰で自宅ローンの取付けが厳しい状況の為、価格協力をお願いが各社から入っている状況。

また、木材の不足状況に関しては、輸入材の入荷が進み、保管倉庫も一杯の状況、合板が不足気味ではあるが、その他、羽柄材、集成材に関しては、不足気味がだんだんなくなってきているかなと思います。住宅の先行き不安のほうが大きく、プレカット工場各社見ていると、弱含みの価格提示をしていると思われる。今年は、非住宅物件が堅調も、住宅の落ち込み予想もある事から、今後の住宅の受注動向により、木材価格が左右される可能性があると思っている。

○柿澤 座長

木材含め、全般的な価格の上昇がかなり大きな問題となってきたということが、お三方共通して指摘された課題でした。合板に関しては入りにくいということが続いているけれども、ほかの製品は多少は良いということでしたが、価格上昇によって住宅建築の先行きそのものに不安を感じられているというお話をいただいた。一方で、非住宅に関して少しずつ伸びていることも確認できたかと思います。

続いて川中、加工・流通のお話に移りたい。まず最初に道木連から全般的な状況も含めて情報提供をいただきたい。

○北海道木材産業協同組合連合会 内田 副会長

今日の話は、いわゆる建築材というところに視点が集まっているのだと思いますけれども、北海道のことを考えた場合に、建築材だけではなくて、いわゆる産業用部材、梱包・栈木、その他もかなりシェアが大きいので、そこをひとつの軸としても考えないといけない。今、ウッドショックと言われてますけれども、コロナのときにどうなったかということから話を考えなければいけないと思っている。

コロナのときには道木連、3回ぐらい会員にアンケート調査を行わせていただき、端的に言って売上げが大きく減少した。3割から5割ぐらい減少し、その際に雇用調整助成金を使って事業を止めて、借入金は運転資金を中心に、平均月商の1～3か月ぐらい、半分ぐらいの業者は、それを借りていることで、いずれ返済が始まる状況の中にあるのではないかなと思っている。

今度はウッドショックということで、外材が高騰した、入らないという話はずっと続いているけれども、建築材は、高い材を仕入れて、合板は相当不足しているらしいが、今、

一所懸命苦勞されている。梱包や棧木の世界になっていくと、国内の原木をそんな高い金で買えない。そこで原木不足が生じて、それがひいては注文が来てもそれに対応できない。今取り戻そうと思っているのがなかなか取り戻せてない。棧木も梱包も価格は多少上がっていますが、そんなに上がっているわけではないので、ここは買い手市場になっているので、原木が上がったから少し何とか上げてくれという交渉はやっているのが現実の状況とと思っている。

ですから、建築材だけに視点を当てるのではなくて、今、そういうところでこの価格差が生じていく中で、北海道の木材産業構造の中で産業用部材と言われるところ、一番コロナで打撃を受けたところは、今、どういうふうになっているか。輸出においても建築においても重要な基礎資材なので、そこを北海道が担っている役割、それに対して原木をどう確保していくかを考えないといけないと思っている。

ちなみに、コロナで売上げも減りましたが、原木の生産も大きく減りました。国有林の統計を見ても、減った分が取り戻せているかということ、減った分が増えるような生産能力は極めて厳しいので、限られた資源をどう配分していくのか、そこを考えないといけない。

最後に一言だけ、札幌市が今、一所懸命道産材で学校とか、いろんな施設を建てようということで、担当者が苦勞されていますが、ある設計業者に話を持っていったら、地域材なんか今ないよと言われて、実はそんなことないけれども、そういう雰囲気が出てきたりしていることも木材の供給側として真剣に受け止めないといけない。これは建築材の世界ですけれども、いろいろな間口の中で考えていかないといけないと思っている。

○柿澤 座長

全般的な状況として、北海道の場合、やはり産業用部材が最重要な役割を占めているので、その点を十分検討して議論する必要があるとの指摘と、今の現状について話をいただいた。それを踏まえて、各事業者の皆様から話を伺いたい。先ほどの川下と同じように、現在の状況と今後の見通し等について、それぞれ、加工の方から、続いて流通の方に情報提供をいただきたい。

○(株)サトウ 松永 代表取締役社長

カラマツ業界の状況ということでお話させていただく。

まず仕事量の関係については、各社同じだと思うのですが、今も忙しい状態で推移している。その忙しさという中身で言いますと、いろんな建築材も含めた新しいオーダー、これがどんどん来てるわけではなくて、やはり既存需要、これに応えていくのが精一杯という中での対応になっている。現在、残業も交えながらやっている、ここ最近の状況に変わりはない。

一方で、懸念されている事項については、全体の需要量に対して原材料の入荷が足りていない。例年どおり、4月、5月、6月はそんなに入荷がいい月ではないが、今期については、春までに蓄材もここ3年ぐらいの平均からすると、やはり少ない方向に行っている

こともあって、それらを食いつぶしながら今進んでいる。一定以上の仕事が増えて、頑張りどころではあるが、やはり先々の原料を定時で使える部分についても食いつぶしてしまう懸念があるので、現在、そこまでの対応については、控えさせていただいている。

樹種で言いますと、特にカラマツ、本州方面からも合板需要が従来よりも強い勢いで集荷されていることもあって、そちら側に出荷されている量については、出荷実績を見てもそう落ち込んではいないのですが、全体のカラマツの出材量が戻ってきている中においては、どうも減っていつているのは、製材工場側に本来入ってきたものがそっちに回って行っていることだと思います。これは、値段がどうしても合板工場が高くつけて買っていくという、製品の原価だとか主張性の問題だとかいろいろあると思うのですが、合板業界が製品価格にも十分転嫁されて、それに見合った原料を買われているという形になっているので、我々、梱包材とかパレット、それも本州の建築材のようにどんどん上げていければいいのですが、なかなかそういう訳にもいかず、ほかの輸入材との競合だとか価格を見ながらやっていかざるを得ないという背景から言えば、合板屋と同じ値段で買うことができていないのが今の実態です。この先懸念されるのが、やはり一番には原料の問題がしばらくはついて回るのかなと思っています。

ただ、需要面についても、ここまでの状況で行ける雰囲気は、今、少し感じられなくなってきている。住宅の着工だとか梱包材関係についても、諸外国のいろいろな事情があり、ちょっと落ちてきているのかなという空気間も出てきているので、今年の夏以降については、減速懸念も十分あることになるので、そうなったときにこの辺の木材の需給バランスがどうなっていくのかをもう一つ心配している。

あとは、今の国の予備費の中から予算がつけられている国産材転換支援緊急事業の運搬経費の補助が、北海道の木材業界にいい方向に寄与してくれればいいのですが、変な反作用を起こさないようになってくれればいいなと心配しているところです。

○佐藤木材工業（株） 佐藤 代表取締役社長

製材については、栈木を中心に製造して出荷している。今現在でも受注は、旺盛な状況。去年の加熱した状況と比べたら落ち着いている。自分たちのできる範囲で注文を受けているが、工場は、フル生産の状況で動いている。

原料については、工場を止めないように買っている状況で、数か月分の在庫は確保している。原料の仕入れの価格が、特に今年に入ってから上がってきている状況。恐らく今年の後半にかけて、もっと在庫の評価額が上がってくるだろうと考えている。

その状況で、外に目を向けてみたときに、アメリカ、ヨーロッパの双方で金利を上げる話が出ている中で、恐らく需要が締まってくるだろうと考えている。今は、特に港在庫もたっぷりあるけれども供給の不安から、価格が落ちていない状況ではあるが、どこでバランスが崩れるのか取れるのか、見通しできずに観察している状況である。恐らくは今年の終わりから来年にかけては、基本は下げ傾向だろうという予測の下で自分たちはどうやっていくのかを常に考えている。

なので、製材については、今年の後半については、仕入れの価格が上がっていくれども、国内市況の見通しはあんまり楽観視できない中で、どこでバランスされるのかを見ている状況。

集成材については、国産材が外材に押されてもともと縮小してきた結果、最大稼働時の3分の1ぐらいで、フル生産という状況。そちらもまだ落ちてはいないが、資材不足、それと住宅の単価の高騰による注文受注減、そういったことの影響は、今後、当然出てくるだろうと考えている。集成材の原料になるラミナについても、去年、一昨年と比べたら価格が高騰している。

素材生産もやっているが、自分のところで抱えている人と設備からいうと、減るわけでもなければ増やせるわけでもないので、現状維持が継続される見通し。ただ、北海道の木が間伐が進んで大径化していくという根本的な問題があるので、山側の対応としては、大径化に対応できるような設備投資、ハーベスターのヘッドを少しでも大きなものにするとか、運ぶフォワーダーを大きなものにするとかいった対応は取れるように、徐々に設備を整えていくという計画で考えている。

○協同組合オホーツクウッドピア 中根 理事長

当社、集成材の製造をしており、前回の1月から大きく変化し、現在はカラマツのラミナの集荷に苦勞している。価格に関しても、この4か月ぐらいで約50%価格が上昇した。これは特に本州の集成材工場から北海道のカラマツラミナの引き合いがかなり強く入って、それに引っ張られる形で、値段を合わせて仕入れをせざるを得ない状況。

先々住宅着工が不透明なところで、非常に不安だな、心配だなというところです。数量に関しても、この4か月ぐらいの間でいうと、買いたい量、予定していた仕入れ量の大体70%から75%ぐらいのところ、量的にもまだ十分買い切れていないところです。一部トドマツに切り替えたりとか、大型のトドマツの非住宅関係があったりして、トドマツでそこを補って、何とかやり過ごしている状況である。特にここに来て、輸入材もかなり量的にはもう入ってきている状況のところ、原料価格が、非常に高騰しているところが非常に心配なところである。

○丸玉木材（株） 八鍬 木材グループ長

当社の合板の生産は、現在もフル稼働生産で対応しており、作れるだけ作って、出荷できる分だけ出荷するという状況です。製品は、年頭の頃ほど逼迫感はないにしても、受注制限は依然続いており、いまだ道内、本州向けとも増量の要望はあるが、そこまでの対応は難しい状況です。製品在庫も少なく、急な注文に応えられるほどは持っていない。

原木については、1月以降、入荷量が消費量を上回る状態が続いており、現状、低水準ではあるが、当社としての適正在庫という面では確保できている。去年同時期と比べても、同じぐらいの在庫量にはなっており、樹種別で見ても、カラマツ、トドマツ半々というところです。

6月についても、発注量自体は、大きく在庫を減らさないくらいは見込めているのです

が、現状の所持在庫量だと、天候などの影響で入荷率が下がるなどした場合は一転することも考えられるので、そこが心配ではある。7月以降については何とも言えませんが、やはり今後、道内原木の引上げがさらに強くなることも考えられるので、引き続き、原木確保の面では、厳しい状況が続くのかなと思っている。住宅価格の上昇もあるので、受注戸数、着工戸数が伸び悩みの傾向にあるという話も聞いており、原木確保の状況と着工戸数減少のバランスがどうなっていくかも注視が必要だなと思っている。

○空知単板工業（株） 榎引 林産部長

まず、加工からお話させてもらいますが、建材メーカーとか、弊社のような加工業者は、海外から安い国・地域からの集材をずっと行ってきたが、このコロナ、ウッドショック、ウクライナ情勢と、一部方向性を変えていかなければいけない状況になっている。安いものを追ってウクライナや東欧等にも集材を行ってききましたが、こういう状況になり、安いものばかり追ってもいけないという限界がここで見えたような気がする。

現在の既存の製品等は、メーカーもカタログに載っていることもあり、値上げの交渉を行ったときには、耳を傾けてくれるようになった状況です。新規商品からしたら、国産材のキャラクター商品、ラステック、節だとか入った商品が一部開発が進んできている。

原木不足に伴い、まだまだ値段が上がっていく予想はしているが、原木数量に関して、広葉樹、針葉樹の伐採が落ち込んでくる時期に入ってくると思うので、これからまだまだ値段がどのような状況になっていくか不安な材料ではある。一部、ロシアから製材とかもKD材を入れていたが、これもウクライナの戦争の始まる前に契約した分のコンテナがこちらに向かっている、そこからの通関がなかなか難しい状況で、一部解消しているが、まだこれからの不安材料でもある。

弊社は山林の購入と伐採業者さんからの仕入れを、合板メーカーに送るのを主として流通関係をやらせてもらっているが、日本の西側と東側の販売価格の温度差、在庫の温度差というか、仕入れ地域が違うこともあって、東側はロシアからの原木又は単板のウエートが多い地域で、まだまだ在庫が少ない状況でもあると思います。西側は、北米材とかの比率が、あとは九州からの集材が多いと思うので、値段交渉がなかなかしにくい状況です。

合板用の針葉樹の仕入れ状況は、例年並みに集材できていて、山の購入も弊社としては順調に進んでいるが、素材入札の値段が基準になって、山もどんどん上がっていている状況でもある。

○物林（株）営業本部北海道グループ 中村 グループ長付特命担当部長

製材工場の方に在庫量とか聞いているのですが、樹種によって開きがあり、トドマツは波があるが、1か月から大体3か月ぐらいの原料はお持ちです。ただ、この4月、5月というのは、林道の状態が悪かったりと、入れないことがあるので、そんなに大きくは増えてない形になっている。やっぱり少ないのはカラマツで、皆さん大体1か月程度ぐらいしか持っていない感じで、業者さんによっては、もうカラマツから替えるものはトドマツ、アカエゾマツのような替わりの樹種を使って生産している状況というのが、今の傾向となっ

ている。

各地で行われている素材公売も足りない地区は、皆さん単価を出して応札していく形になっており、ないものねだりではないのですけれども、量が集まっているところなどは、かなりの価格で皆さん落札されている状況となっている。

私ども、立木公売とかも入札参加していますが、落札物件に関してはある程度保有しておいて、一定期間にある程度の数量・価格を安定的に出していくのですが、タイムラグがあるので、今後の動き方によっては、皆さん心配されている住宅着工戸数の落ち込みなどが具体的になると、今買っている物件は結構皆さん単価出して落札していたりするのですが、今後は見極めどころが難しい状況になってくると思われまます。

○日本製紙木材（株）北海道支店旭川営業所 大塚 所長

弊社の状況でいきますと、1月から変わりつつあるのかなというところなんです。仕入れ価格の上昇がどんどん上がっている中で、販売もそれにつられた形で上がっている。ただ一方で、このまま上昇していくと、道産材に固執することはないのではないかとという見通しが一部出始めかけている。それとはまた別ですが、今まで木製品を使っていたところも、これ以上ウッドショック、ロシア・ウクライナ情勢の影響による価格上昇は重々承知の上なのだけれども、木材ではなくて違うものを考えざるを得ないという話もちらほら聞こえ始めている。このままでは、木材以外の別の素材に取って代わられる懸念もあり、この先の状況が不透明なことが非常に心配しているところである。

○北海道木材産業協同組合連合会（木材チップ・山棒対策委員会） 吉田 常務理事

木材チップ・山棒対策委員会はコロナの関係で開けなかったが、いろいろな方から聞くところによれば、原木価格が非常に上がった中であって、背板チップであるとか、チップ原料等につきましても、買い入れの価格についてある程度上げて欲しいという話があったので、各会員とも調整しながら要請行動も行ったわけですが、これから輸入チップ等もどうなるのか分からない状況があるので、原木が上がっている中で、上げてもらいたいという話が皆さんどこかにあるのかなという感じは持っている。私どもとしても、6月ぐらいには対策委員会を開いて、状況・要望等も皆さんから聞きながら、今年については対応を取っていく必要があるのではないかと考えている。

○柿澤 座長

木質バイオマス、それから製紙関係の方に情報提供をいただきたい。

○オホーツクバイオエナジー（株） 長谷川 代表取締役社長

チップを紋別バイオマス発電に燃料供給しているが、今のところ原料に対する不安感はいそれほどない。買っているチップも順調に入ってきており、自らチップ生産するという意味での丸太の備蓄も準備しているのでそれほど不安感はないが、前回もお話ししたとおり、燃油価格の上昇に伴うチップの購入価格とか、原木のトラック運賃が少しずつ上がっているところと、国有林の公売等を見ていると、原材料がじりじり上がってきているところもあるので、今後、原料については値上がりは避けられないのかなと懸念している。

○王子木材緑化（株）北海道支店 松浦 製紙原料・バイオマス燃料部長

製紙原料関係のコメントをすると、原料材で全道の公売価格の中で、上がってきている地域がオホーツク海側と道東に限られており、道央地区からやや北側に向けて、従来よりむしろ下がっている傾向にあり、ただチップ工場自体は、原料が買えない状況が続いている。なかなかチップ工場に原料が集まらない状況は、もうずっと続いていることで、システム等の値段に関しては上がっているけれども、公売で出てくるものが買えなかったり、調達がなかなかうまくいってない。一般材の流通もなかなかないことで、チップ工場にもものはない。道木連はじめ、チップ価格の値上げの陳情等もあり、これを製紙工場側にこれから下期に向けて交渉したいと考えている。一方で、製材工場が好調なこともあり、製紙工場の原料チップ自体は、かなり順調に集まっている状況がある。ただ、これからにおいて外材の調達が非常に不透明である。東南アジア、中国の新たな製紙メーカーに日本のメーカーがチップの調達で買い負けている状況もあるので、国産材、道産材に製紙原料として、もしくはほかの目的で北海道以外の地域からも何か利用する状況が発生するかもしれないということもあり、その辺を踏まえて、我々としても製紙工場、製紙メーカーのほうに交渉していきたいと考えている。

○柿澤 座長

加工、流通関係の方々からいろいろとお話を伺いました。やはり主に共通していることとしては、カラマツを中心として、原材料の確保にかなり難しさを抱えていること、それと価格が上昇しつつある中で、一方で需要がかなり今後不透明になるだろうという、皆さん思いを持っておられて、今後どのような形でこれを折り合わせて考えていくのはかなり難しい状況だということを経験して指摘をいただいたと思います。

では、最後になりますけれども、川上から情報提供をいただきたい。

○王子フォレストリー（株） 荒井 代表取締役

私ども、素材生産業者ということで、基本的には、自ら立木を買って素材を生産して丸太販売をする事業と、素材生産を請け負う二つの事業を柱として林業労働者の通年雇用を図っている状態なのですが、立木購入の話をさせていただくと、当然予想されたことですが、立木の価格が上がっている。公売でもなかなか落とせない。立木の場合、タイムラグがあり、2年ないし3年の搬出期限の中で作業をする。通年雇用を見越して立木を手配して、それを期限が迫ったものから順次やっていくことになるので、今、高い公売材を無理して落とすと、2年後どうなっているか当然非常に不安になるわけです。とはいえ、とにかく作業員の事業量を確保しなければならない。我々の作業員は、山で仕事する以外させる仕事がないので、とにかく現場を動かさなければならない。そうすると、どこまで無理するかですが、無理してでも立木を確保しておかざるを得ない。通常算定した金額では、とても落とせないなので、さてどうするか。今、確かに材を出せば利益は上がりますけれども、2年後どうなっているだろうかというあたりが大変不安要素となっている。

○国安産業（株） 港 常務取締役

今の素材生産の状況としまして、事業量に関しては、立木販売量も素材生産向けの発注量も増加していることで、事業量に関しては十分確保できる状態で、非常によい。また、原木価格においても、非常に高い価格になっており、非常によい状況で進めている。

原木がこんなに上がったこともない状況で、以前の価格ですと、細い間伐系の伐採を行うと、採算的にも合わないところもあったが、今の価格では十分な状況で進めている。

今、原木不足で、供給量を上げることなのですが、やっぱり人がいないことで、ここ2、3年、人が減り補充ができない状況で、人をいろいろと集めてはいるが、今までのやり方では集まらないということで、多方面に募集をかけて集めて、少しでも今の状況よくするように、生産量を上げて供給していかなければならないとは思っている。

去年からずっと原木不足が続き、原木の価格が上がってましたが、周りの工場も原木在庫抱えているようで、例年に比べると少ないが、去年の非常に原木不足が厳しい頃よりは、若干は原木抱えているのかなというところで、原木価格も少しは収まっているような状況です。まだ原木関係も不足感はありますが、原木（価格）は上げて集めていこうという話もあるので、少しでも生産・供給できるように、これから搬出においても常時搬出できるように、そういう対応をしながら進めていきたい。

○今井林業（株） 西村 代表取締役社長

素材生産業ということで、今の現状として、コロナ、ウクライナの問題も含めて、製品市場が外材に対応していた部分が供給できない。これを国内材の素材生産業者が、供給できるかどうかという問題なのですが、素材生産業としては現場によって、量的にはある程度あるけれども、うちらも含めて現場自体が安全管理の部分でリスクがあるので、急に3割を増産できる態勢にできるかというところ、これがなかなか難しい。大型機械である程度増量というのは可能ですが、大型機械で作業できる場所は、地形の良い現場等限りがあるのでなかなか難しいかな。大型機械というのは、安全面も含めて一気に増産できるかというのはなかなか難しいというのが今の現状だと思っている。

外材で穴の空いた部分が道内も含めて裏山資源はある程度あるのだけれども、造材業者がそこまでできるかというところ、なかなか難しい話かなという部分があると思う。

製材工場ですと、見える部分に工場があって、人を配置しながら増産しようと思えばある程度できると思うのだけれども、造材自体はなかなか現場によってそういかない部分で、この穴はなかなか埋めれないのでないかと思う。

製材製品が高くなれば原木も高くなるという部分はあるが、この先は、この穴をどうやって埋めるのかとなると、特に造材の部分は安全面を最優先して考えながら、セットを組みながらという大きな問題があるので、なかなか難しいというのは現状かな。

市場もこのまま進むのかどうか、一般建築も含めて今、坪100万円はどうかというところ、そんなお話も出ているので、これはある意味では着工戸数も落ちるとか、いろいろな不安、先行き不透明なマイナス要素はあると思うので、川上の素材生産業として頑張るには頑張るが、その辺が一気に増産できないという原因があるかなと思う。

カラマツに関しては、私は釧根地区なのですが、ある意味では国有林は植えていない時期が長かったので、カラマツに関してはなかなか難しいかなというのと、カラマツの梱包材含めて、実行している工場はそれぞれ小規模の工場になると、今道東・釧根地区では、トド、エゾにシフトせざるを得ないとなると、カラマツは無理だけれどもそういうふうにシフトするという中で、現状としては、工場なら工場で小径木のつなぎをやりながら、裏山にあるトド等の原木を集めて継続していくという状況ではないかなと思っている。

○柿澤 座長

森林管理局から国有林の状況等について情報提供をいただきたい。

○北海道森林管理局 中野 森林整備部長

国有林に関しましては、4月、5月と昨年度生産した材を売払っているところで、やはり価格、特にカラマツがかなり上昇が見られるということで、国有林としましても、昨年から続けていることですが、立木販売の前倒しであるとか、素材生産を早期発注して早期に材を出すという取組を行っている。

また、素材のシステム販売を、今、募集しているところですが、昨年度に比べて量も増やしており、素材の生産量についても昨年より1割増しということで、材の供給については、しっかりこれからも図っていきたいと考えている。

○柿澤 座長

素材業者の川上から、素材価格が上がったところでメリットもある一方で、将来的な状況に関して若干懸念もあること、それともう一つは、やっぱり増産というのは難しいことを改めて指摘をいただいた。それから、国有林に関しまして、今の原木不足、価格高騰に関して様々な対策を取られていることをお話いただいた。

北海道の林業木材課から全体的なところでコメント等ありましたら伺いたい。

○北海道水産林務部林務局 常本 木材産業担当課長

現在、輸入材が価格高騰とかあり、道内の製材工場でも原木不足が大きな課題になっていますが、当面、道としてできることとしては、道有林における入札の前倒しを考えており、今年度の発注量の9割は、上半期で発注してしまおうといった計画も立てております。また、建築材不足に対応するために、これまで搬出期限3年という形で入札をやって契約をしてきたところですが、今年度、逆に1年に短くした形で発注するという新しい契約の形も取ろうと考えています。

人工林の伐採ですので、道としては伐採後は必ず植林をしていくことが重要だと考えており、その中で造林の人手不足が進んでいるので、それに対応するためにコンテナ苗の増産を計画しており、さらに植栽本数を減らして、コンテナ苗を増やして、何とか造林も確保しつつ伐採も増やしていこうと、調整を進めているところです。

建築材の不足に関してですが、乾燥施設の整備ですとか、そういった施設の整備についてはもとより、プレカット工場と製材工場の連携という取組を現在進めているところで、本年度中にそういった連携の課題なども整理しつつ、全道に向けて展開していきたいと考

えている。

○柿澤 座長

道内の現在の大きな状況につきましては、今、情報提供いただいた中で分かったかと思えます。ここで改めてまとめませんが、皆さん参考にしながら今後の在り方についてお考えいただければと思います。

② 国産材への転換等への支援について

○柿澤 座長

議題の2番目、林野庁で国産材転換支援緊急対策事業をスタートされたので、これについて説明をお願いします。

○林野庁木材産業課 永島課長補佐

資料5～8について説明。

○柿澤 座長

ただいま説明された内容について、皆さんから質問、意見等を伺いたい。

○(株)サトウ 松永 代表取締役社長

先ほどの事業の中の運搬経費補助ですけれども、林野庁でも危惧しているとおり、先ほどの話でもいろいろあったのですが、実は北海道地区の場合、原料、非常に不足をしている状況の中で、そういった事業が展開されるのですが、増産という声はかなり織り込まれているので、従前から取り組まれている数量は除外して、新たに増える量だけを対象にするという認識でよろしいか。それとも、今までの量もひっくるめて、全て対象になるか。

○林野庁木材産業課 永島課長補佐

ロシアの関係で輸入が滞ってきている部材を国内の資源で賄う必要性を踏まえて、これまでの集荷圏よりさらに遠方からの原木等の集荷が必要となることから、その遠方から集荷する部分が増産につながるという意味で使っている。今回の事業で要件となるのは、一部樹種によっては、例えば素材生産量を比較して増えていることを申告していただくなど細かいところはいろいろあるが、原木のトラック運搬でいえば、100キロという一つの要件があります。それが製品になると、販売の集荷範囲が広がることで、300キロという一つの要件をつけさせていただいている。

○(株)サトウ 松永 代表取締役社長

ラミナ等製品を扱っているのですが、それらも対象になるのかなと考えてはいたのですがけれども、基本的に今の体制だと、お金をいただいてもなかなか増産はできない状況につながるところが結構あるのではないかと考えていて、極端な話、原料も同じ状況で、総体の出材量が増えない中で力関係での取り合いの構図が変わるだけにしか見えないというのがあって、恩恵を受ける側とそうでないところが木材業界の中では出るのはないかとすごく危惧されていて、終わった後にどうなっているのか分かりませんが、そのあたりも含め

て林野庁の内部で検討していただいて、全国的に見ると増産が可能な地域とか余裕のある地域はあると思うので、既存量も含めた部分で対象にするのは、今まで買われていた分ではどうだったのということになるので、非常に財政状況の厳しい中、お金を使う必要はないのではないかと、あくまで個人的な意見ですけれども考えているところ。

○林野庁木材産業課 永島課長補佐

今から運用していく中、また、2次募集があったりと、運用の中でも反映できる部分もあるかと思うので、いただいた意見も参考にしつつ、本格的には今後、林野庁として川上、川中、川下に対してどういう施策を打っていくのが一番大事なところかと思えますので、そういったところにも意見等を踏まえ考えていきたい。

○柿澤 座長

道内でも木材の取り合いみたいなことに関していろいろと懸念もありますので、その点もいろいろと配慮されたお考えをしていただければということをお願いしたい。

本日は、様々な観点から意見を提供いただき、よい情報提供・交換ができたと思う。

なかなか見通しが不透明なところがまだ多くあるが、今後もこのような形で情報交換していくことが大変重要かと思えますので、引き続き協力のほどよろしく願います。

以上